

さまざまな分野で活躍する傑出した若者達を
探し出し顕賞するTOYP大賞。

その第10回に当たる今年、

精力的な緊急救援医療活動が評価され、

見事、グランプリに輝いた東京都葛飾区で開業する内科医、

現役のJCメンバーでもある鎌田裕十郎さんに、

その活動の歩みをうかがった。



こどももの涙に動かされ、 老女の涙に教えられた。 精力的な緊急救援医療活動を 展開する医師・鎌田裕十郎

1994年7月、以前から部族
間抗争の絶えなかったケニア中央
部のルワンダ共和国では内戦の激化
により大量の難民が発生、彼等は
隣接国のザイルやタンザニアに逃
れた。

飛び交う銃声と
漂う悪臭
想像を絶した
難民キャンプ

「コレが赤痢に冒されているのでし
よう、母親が倒れているその横で、
べたっと座った子どもが涙を流して
いる。その泣き顔が眼に焼き付いて
離れませんでした」

8月始め、テレビ放映された難民
キャンプの惨状を伝える1枚の写
真が、ひとりの日本人医師の心を

鎌田裕十郎 (かまたやすしじゅうろう)
1956年1月31日茨城県生まれ。日本大学大
学院修了。医学博士。94年10～11月、ルワンダ
難民救援医療活動に従事。95年1月、阪神・淡
路大震災における緊急救援医療活動に参加、
24時間診療と巡回診療を行う。同年5月、北サ
ハリン大震災における緊急救援医療活動に従
事。同年10月、国内民間救援団体ネットワ
ーク「72時間ネットワーク」代表に就任。ほかに
AMDA(アジア医師連絡協議会)ロジスティ
ックス委員長、茨城ブロック取手JCに所属する
JCマンでもある。



動かした。

東京都葛飾区で病院を経営す
る鎌田裕十郎さんは、かつて大学
病院に勤務する研究医だった。そ
れが30歳の時、父親の突然の死に
よって開業医へ、「象牙の塔」から
「実社会」に飛び込む。それから8
年、夫、そして父親となり、社会人
としての自信が芽

生え始め、「自分は
社会に対してもつ
と何かできるので
はないか」と考えて
いた矢先、ルワンダ
の悲劇を知った。
「何とか力になり
たい……」
そんなとき鎌田
さんはAMDAと
出会う。

AMDA(アジア医師連絡協議会)
は1984年に設立され、現在、ボ
ランティアを含め約1500名の会
員を擁する国連NGO。世界18カ
国に支部を置き、アジアやアフリカ
で緊急救援医療や長期の医療救助
活動を精力的に行っている。

迷わずAMDAに入会した鎌田
さん。2カ月後の10月10日には、ザ
イル共和国ゴマの難民キャンプに
いた。

すでに国連や自衛隊、各国のNG
Oも入っている。治安や物資の供給
も特に心配していなかった鎌田さん
を待っていたのは、難民による物資
の収奪、ザイル兵の放つ銃声が絶
えない日常だった。いつ噴火すると
もわからない溶岩台地の上に設置
された難民キャンプには人間の体
臭、処理できない排泄物の悪臭が常

に立ち込めている。そんな劣悪な環境のなかで活動するNGO。鎌田さん自身も銃口を突き付けられる危険な目にたびたび遭遇している。

「難民に襲われ、自衛隊に救い出されたこともありましたが。救援活動に携わるNGOでも、抵抗すれば暴行を受けるし、殺されることもある。」「銃口より政権が生まれる」という毛沢東語録を実感させられる毎日でした」

ゴマから27km離れたキンバ難民キャンプでの医療活動は多忙を極めた。

「1日に400人から多い日では600人の患者が訪れました。対する医師は私を含めてたったの3人。看護婦が対処することも多かったのですが、それでも3人で毎日、虫歯から外傷、妊娠、病原性大腸菌、AIDSと、あらゆる症状を抱えた200人以上の患者を診察しました」

キンバのルワンダ難民キャンプでは、国連高等難民弁務官事務所が安全の保障ができる時間帯として指定した朝9時から午後3時まで重責抜きで診療に当たった。



被災地・神戸に 羅呈した脆弱な 社会の実態

ルワンダでの活動期間も終わりを迎え11月末に帰国。ほっと一息ついた矢先、あの阪神・淡路大震災が起った。

地震発生翌日の95年1月18日、鎌田さんは緊急出勤。そして瓦礫と化した神戸で被災者の姿を見たとき、鎌田さんは強いショックを受ける。

「これは難民キャンプと同じだ、いや、人々の心のすさみ方はそれ以上かもしれない」

家や家族を失い、打ちひしがれている人々が放り出されている。鎌田さんは戦後50年かけて日本人が作り上げた社会の脆さを思い知らされたという。

「思えば、銃弾の飛び交う難民キャンプの方が、あのときの神戸よりも人々のあいだに助け合いが行われていたような気がします。アフリカ人は政府も警察も軍隊も信用していかないかわりに、肉親や仲間どうしの結束がとても強い。そして彼等は互いのために命懸けで助け合う。しかし、神戸ではそんな光景を見るのがほとんどなかったのです」

自分達の社会がこのあり様なのに、外国に人を助けに行くなど、おこがましくはないか? こんな社会のなかでボランティアであること

の意味に疑問を抱いたまま鎌田さんは1週間後に帰京。落胆、失望のあまりボランティアを辞めよう、とまで思い詰めてしまう。

そんなとき、師と仰いでいたある僧侶から、「医者である君は皆から先生」と呼ばれているが、先生という字は「先に生きる」と書く。人の前に立って行動してこそ、真の先生なのではないか」と諭される。

「神戸での出来事は誰にとっても初めての経験。混乱は仕方なかったのかもしれない。大切なのはその経験から学ぶことなのでしょう」と鎌田さん。

後にその僧侶は病気で亡くなる。そして、お通夜だうたまさにその日、北サハリンで大地震が発生。師の言葉を胸に、鎌田さんはA.M.D.A医療チーム第一陣団長としてサハリンへ飛んだ。

在留邦人女性から 汗を流すことの大切さ 教えられた

被災地で医療活動に取り組み鎌田さんらのもとにA.M.D.Aの第2陣

が訪れる日、空港へ出迎えに行つた鎌田さんは、ひとりの東洋系老婦人から話し掛けられた。そしてサハリンに多いといわれる韓国人と思つていたその女性が、実は在留邦人だと知る。

「戦後以来、日本人であることを

恥ずかしく思っていました。だけど今回、真つ先に飛んで来てくれたのが、あなたがた日本人だった。私は今、自分が日本人であることを誇らしく思います」と、日本人であるが故に永い間、辛い目に遇つてきたであろう彼女は涙を流しながら語つてくれました」

このとき鎌田さんは、救援活動にあたってモノやお金を送るだけでなく、実際に人間が動くことの大切さを痛感したという。

「私達は武器を手に血を流すことはできない。しかしシヤベルやつるはしを手につく、あるいは聴診器や注射器を持って、汗だつたらいくらでも流すことができるのです。湾岸戦争の際に1兆3000億円もお金を出しながら、日本は「サンキュー」の一言も言ってもらえなかった。しかし、目に見える形で適切な援助を、適切な時に行えば、世界は必ず認めてくれる。国際社会は非常にわかりやすいのです」

現在、鎌田さんの関心はもっと身近なところにも向けられている。鎌田さんが院長を務める「かまた医院」は古い住宅地の真ん中にあり、お年寄りの患者がとても多い。たくさんのお年寄り達と毎日のように接しながら、鎌田さんは高齢化社会の現実を肌で感じている。

「高齢化の問題は、とても税金さえ払えばいい」という姿勢で解決できるものではない。市民の能動的な

協力が不可欠なのです。そのためにも行政ぐるみで「ボランティア介護体制」を整えるべき。参加したいという市民は少なからずいるのですから」

災害時の効率的な物資の供給システムを模索する「A.M.D.Aプロジェクト委員会」の委員長、そして災害発生から72時間以内の効果的な救援活動を目的に設立された72時間ネットワークの代表を兼務する鎌田さん。その精力的な活動には敬意を表さざるを得ない。だが、私達は、そんな鎌田さんに声援を送っている場合ではないのだ。もはや私達も傍観者ではいられないのだから。

「自分は社会のために何ができるの問いかけから私達も始めてみようではないか。」



9月20日に行われた96年度TOYP大賞受賞式。グランプリ副賞として貸与されたBMWの大きなキーを手にはたす鎌田さんの後ろには他分野での受賞者が並ぶ。